「土の記憶」 P50号　和紙にボールペン・珈琲

ボールペン画家

酒井崇展

東京オリンピックを前年に控え、更に世界との壁が消えつつある今こそ、日本の美とは何か、自分とは何か、絵画を通してその根幹を見つめたいと考えます。この展覧会は、グローバル化の中で薄れつつある「土着」の美意識を、現代の眼・現代の画法によって発掘する試みです。

（画家・酒井崇）

土着ポップ

Takashi Sakai Solo Exhibition

2019年4/17(水)▸28(日)

時間：12：00~20：00（最終日 ~18：00）※月曜休廊

会場

tokyoarts gallery

〒150-0011
東京都渋谷区
東2丁目23-8

Ballpoint Pen Drawing Artist

略歴

1978	長野県飯田市生まれ
2003	多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒

【個展】

2009,10	GALLERY b. TOKYO	（京橋・東京）
2011	長野県飯田創造館	（飯田・長野）
2012,16	GALLERY b. TOKYO	（京橋・東京）
2017	tokyoarts gallery	（渋谷・東京）
2019	DORADO GALLERY	（早稲田・東京）

【グループ展・アートフェア】

2010,12	ギャルリー志門	（銀座 / 東京）
2011~17	長野県飯田市美術博物館	（飯田 / 長野）
2011	Lessedra Art Gallery	（ソフィア/ブルガリア）
2012~18	ギャラリー枝香庵	（銀座 / 東京）
2012,13	白白庵	（南青山 / 東京）
2014~16	増上寺	（芝公園 / 東京）
2018	松山文創園区	（台北 / 台湾）

【賞歴】

2009	「第 14 回 新生展」	入選
2010	「第 6 回 世界絵画大賞展」	協賛社賞
2011	「シェル美術賞 2011」	入選
2012	「ドローイングとは何か公募展」	入選
2017	「PAINT50 vol.4 」	ギャラリー賞
2017	「シェル美術賞 2017」	入選

【その他】

2018	鳥居みゆき単独ライブ「狂宴封鎖的世界」宣伝美術
2019	塩出太志監督「この世はありきたり」宣伝美術

酒井崇 Sakai Takashi

@ballpointsakai　tak_sakai

http://sakai-ballpen.com

古本屋で買った60年代当時のファッション誌を眺めていたら「最新ファッションで初詣に行く」なんて特集がありまして、サイケでビビットな洋服にツケ睫毛をした女性が、真っ赤な鳥居の前でポーズを決めていました。これを見た瞬間、「土着ポップ」という言葉が頭をよぎりました。
それぞれの風土、それぞれの根っこを失ったグローバル化の先では、何者でもない平均化した存在たちが世界を埋め尽くすだろうと思います。
“サイケと鳥居”のような奇妙なコントラストこそが、世界を豊かに面白く彩る秘訣なのではないかと感じています。

F3号「美」（和紙に工芸漆）

酒井崇が描く精妙な線によって浮かび上がるのは、視る者を「あちらの世界」へと誘うトンネルだ。それは時に森の中に佇む鳥居として、また時に幽玄な女性の眼差しとして姿を表す。そしてその線の重なりと余韻が画面全体を包み込むとき、「こちらの世界」と「あちらの世界」の境目は朧気にほころび、私たちは未知の空間へと連れ出される。

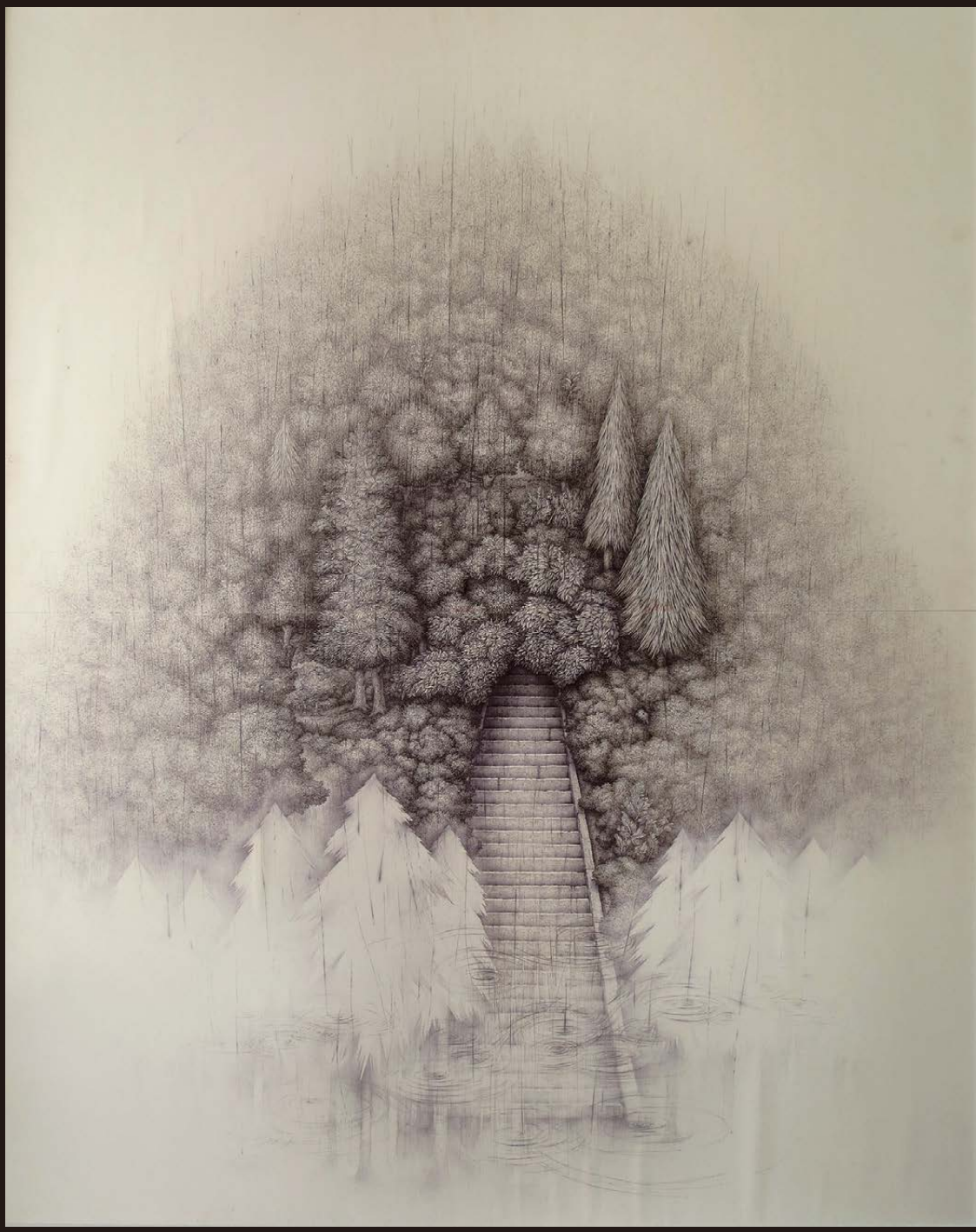
長野県に生まれ育った酒井が、取り分け強く「死」の存在について思い巡らすようになったのは小学生の頃だ。その頃、山奥に住む祖父母の家によく宿泊していたそうなのだが、長屋の奥には山岳信仰に基づいて集められた太鼓や剣、人形、更には先祖の遺影といった物がひしめき合う部屋があり、酒井は子供ながらにその異質さに恐怖を覚えたという。そしてそこでの体験が、後に「生」と「死」が混在する世界を形作る原型となった。

酒井を代表するボールペン画は、光の当たる部分は紙の地の色を残し、影の落ちる部分にほとんど線と判別できないほどに緻密な線を重ねていくことで描かれる。モチーフは、女性、植物、風景と多岐にわたるが、最も特徴的なのは女性像だろう。陰影によって生まれる立体感が女性の骨格や重量感をリアルに感じさせる一方、その首は異様に長く、瞳からは感情を読み取ることができない。体からは妖気が漂い、空間全体を支配している。それらを酒井は下書きもなく描きはじめるそうだが、集中するにつれ自身の意思は声を潜め、作品との対話がはじまる。そして絵が心地よいと訴えかけてくる場所に、「どうぞ」と線を置いていくのだという。

木彫の彫刻家は素材の木の声に導かれて形を削り出すというが、酒井が女性像を描く行為は、ともすれば能面の制作過程と近しいのではないだろうか。彼自身、死者と生者が混在する能楽の表現に強く惹かれると語っているが、共通する点はそれだけではない。能面は角度によって喜怒哀楽を表すため、正面から見ると生気がなく全ての感情を内包したような表情をしている。酒井が描く女性もまた、あらゆる感情を超越し、それゆえに「生」そのものを飛び越えてしまったかのような趣がある。また酒井の描く線は、対象の輪郭をなぞるだけではなく三次元的に対象と空間を融合させるように重ねられており、その点でも彫刻的であると言うことができるだろう。

ところで、描かれた女性が身に纏っているものを見てみると、1960年代後期に当時世界中の若者を魅了したヒッピーカルチャーを彷彿とさせる紋様やタトゥーが入っていることに気付く。一見、能楽の「生」と「死」を往き来する幽玄の世界とサイケデリックなヒッピーカルチャーとは相容れぬように思われるが、どちらも禅の思想に強い影響を受けており、この不思議な共鳴が西洋とも東洋ともつかぬ特異な空気感を生み出している。

酒井は、2011年に描き上げた「雨の古森」がひとつの到達点だったという。この作品では森の奥へと吸い込まれるように続く階段が描かれており、その森と階段の手前に重なって雨の水紋が広がっている。別次元の空間を繋ぐ境目がはっきりと描かれた、まさに象徴的な作品だ。酒井の描く「あちらの世界」と「こちらの世界」のトンネルを前にしたとき、私は「死」によって照らし出される自らの「生」の姿を目の当たりにする。それは繊細だが確かに積み重ねられた、彼の描く線によく似ている。



「雨の古森」2011年　F50号 バリアペーパーにボールペン・パネル

線が誘う「生」と「死」のトンネル

佐藤 妙（キュレーター）

「幽女」 197×288mm 紙にボールペン